

1章 高齢化社会を成熟社会に：

‘限界集落’を、人を引き寄せる成熟村に

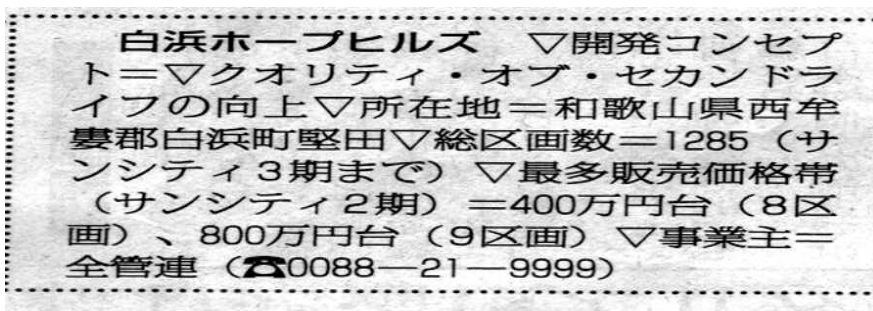
1. 農業を求める団塊の世代と若者達

定年退職した団塊の世代の人たちが農業を求めて農村に引っ越す話は幾つもテレビのドキュメンタリーで取り上げられ、決して珍しくない。筆者の友人のお嬢さん夫婦は30代半ばと未だ若い、都会を離れて山陰の田舎の民家を購入して住み着いている。

‘限界集落’とは65歳以上の人たちが人口の過半を占める集落のことであり、高齢化よりも人口減少が問題になっている。高齢者たちの多くは永年住み続けた集落と家を離れたがらない。

人口が大巾に減少している集落には空き家や耕作放棄地が十分にあり、都会からの移住者を受け入れる住宅と農地の確保は比較的容易であろう。問題は都会から移住したくなるインセンティブをどう創出するかにある。団塊の世代も是非とも田舎で暮らしたい若者たちもウェルカムの集落をつくる方策はあるのだろうか。

ひとつは南紀白浜にある‘白浜ホームズ’のように分譲地を開発して、シニア向けの団地を作り、そこを集落とセットにして農作業を介して人の交流と和をつくることであろう。農業を続けている集落の高齢者が農作業を指導する仕組みつくりのポイントがあるかも知れない。



(産経新聞 2009年12月18日 17ページ 特集記事)

2. 高齢者に肉体的衰えを克服できるインフラ整備：介護ロボットに可能性を託す

二つ目は高齢者にとって介護ケアが十分に行われ、彼ら彼女らにとって心地よい‘終の棲家’としての‘安心’が得られるようなインフラ整備を行えるかである。生活支援・介護ロボットがその中心のひとつと考える。それには集落に‘シニア支援ロボット開発センター’（仮称）を誘致して複数のメーカーや研究機関が、組合方式をとって共同・合同で技術やインフラのシステム開発を行い、その試行実験をこの集落で行えるようにする。当然、研究者・技術者そして看護医療大学の分室も併設されて、この試行実験を年間を通じての実習と位置づけて必須単位習得の場とする。

生活支援・介護ロボットの理想像を求めて、その設計コンテスト、優秀な設計を実現するためのロボットコンテスト（ロボコン）を毎年行う。こうして優秀な学生を掘り起こし、エンジニアとして採用して開発に加わってもらう。

介護の介助は介護者が腰を痛めやすい。その具体像をL F誌（株式会社大京の広報誌 2010 年 1 月号）から引用して三例示す。このような体力勝負の介助作業をロボットが如何に手軽に、安く、簡単に補助してくれるかがポイントの一つになるであろうし、ロボットコンテストの初期のテーマにもなるだろう。





3. 都会からの移住者、長期滞在者を引き付ける魅力の創出

三つ目に、集落の構造を考える。集落の中央に広場（アゴラ）を置く。毎月お祭りをを行う。広場を工芸教室、囲碁将棋道場、オルガンのある音楽室（コーラス室）、卓球場、料理教室、カフェテリア（喫茶室）、図書室などが囲む。これらの教室にはすでに使われなくなった小学校の旧校舎を利用しても良い。

ひとつだけユニークな映画館を提案したい。観客席の周囲360度をスクリーンにし、さらに天井もドーム状のスクリーンにした半円球の映画館である。ここで毎週、世界旅行が楽しめる。南極、北極、アフリカ、イタリア。。。そのフィルムはインターネットによって供給される。

住民たちは忙しい。互いに教えあうような工夫がなされ、自分の半生をエッセイにしてお話し会で披露しあったり、定期的に訪れる小学生たちにおもちゃ作りをしてあげたり。。種々のことで希望すれば誰もが‘主役’になれる。心理学を応用して高齢者たちの生きがいに配慮がなされる。その専門家養成も前項②に示した研究所の役割のひとつであり、研究所の専門家がこの役を引き受ける。

例えば理化学研究所名古屋支所では東海ゴム工業との共同で、要介護者を車椅子から抱き上げてベッドに寝かせる介護支援ロボットが開発中である。腕などにセンサーを内蔵させ、発泡ウレタンなどで直接金属が人間に触れないように工夫されている。数年後に介護施設でモニタリングを始める計画だという。このほか、アイディアとしてセンサーで体全体の動きをキャッチして歩行支援や農作業など力仕事の支援を行えるようなロボットスーツなども注目されている。経済産業省は日本の医療を国際ブランドとするためにも、こうした部門の発展に期待している（産経新聞平成22年2月11日東京版）。